

関係人口と取り組む地域づくり ～石狩市浜益の事例

NPO法人 ezorock

NPO法人ezorockは、2000年に野外ロックフェスティバルのごみ問題に若者が取り組んだことをきっかけに設立されました。現在では、約400名を超える会員を中心に、北海道各地の地域課題に年間のべ2,000人以上の若者が参画する仕組みを展開しています。日常的には、約100人のプロジェクトメンバーと共に参加型の組織を運営しながら、課題先進地とも呼ばれる北海道の「地域課題解決」と、課題最前線の泥臭い現場に若者が取り組むことで「青年層が育つ」ことの両立を目指しています。

1 新たな地域の担い手「関係人口」

北海道では、人口約500万人のうち、約250万人が札幌近郊に暮らす極端な一極集中が進んでいます。特に高校生以上の青年層は、進学や就職を機に移り住みます。ezorockでは、札幌に集まる青年層を様々な形で地域に送り返す取り組みを行っています。暮らしの中心は都市部に置きながらも、地域の担い手になる「関係人口」です。ライフステージの変化の中で都市部に暮らす青年層がすぐに地域へ移住することは難しいですが、地域に関わりを持ち続けることで、その地域には住んでいないが担い手となり、地域への愛着が形成されていきます。近年、このように住民票の有無に関わらず地域に関わる「関係人口」が新たな地域の担い手として注目されています。

ezorockが関係人口創出のフィールドとして関わり、第二拠点を構えるのが石狩市浜益区です。滞在しながら活動できる拠点を整備し、年間200人以上の若者が関係人口として浜益の地域活動に参画しています。

2 関係人口となる若者は何を感じるか

浜益では、関係人口である若者たちが幅広く地域活動に取り組んでいます。子ども向け自然体験活動の実

施、果樹園など農業の担い手、利活用されない農作物を活用した商品の開発・販売、お祭りへの参加・運営サポート、そして、関係人口をさらに創出するための拠点の整備や発信などを行います。2009年から関わりを持ち始め、10年以上の時間をかけて、少しずつ地域住民との接点を増やし、現在は協働事業・団体も設立されています。

浜益に関わる若者からは「第二の故郷を見つけた」「また帰ってきたいと思える場所」「名前を呼んでもらえるから居てもいいと思える」「自分にもできること、役割があることを感じる事ができた」という声が聞かれます。浜益における担い手の一部となると同時に、関係が希薄化する都市部に暮らす若者にとっても、人との関係性を学び、自ら活動を生み出し、参画することができる浜益が貴重な場になっているのです。



ezorockの石狩市浜益区の活動拠点「はまますベース」の外観

3 石狩市浜益区の概要

石狩市浜益区は、2005年に石狩市に合併した旧浜益村です。札幌から車で約1時間半。日本海と三方を山に囲まれ、約40年前に国道が全線開通するまで、主要な交通手段は、船もしくは険しい山道で、かつて「陸の孤島」と呼ばれていました。人口は約990人で、合併時からは半減しています。主要な産業である漁業、農業の現場や地域づくりのフィールドでも担い手が不足しています。

4 外から来る若者を地域はどうみるか

ezorockと浜益の地域住民の関わりのターニングポイントをいくつかご紹介します。

(1) 福島児童の受入

東日本大震災後、全国で福島の子どものための保養キャンプが展開されました。浜益でも一部実施しており、2018・2019年にezorockと連携団体が浜益をフィールドに福島児童の受入を行いました。その際、地域住民のみなさんに体験フィールドの提供、地域内を巡るウォークラリーの各要所に立つ村人として、ご協力いただきました。ezorockの若者の活動に地域住民が「協力」した第一歩となった出来事です。

(2) はまますベース誕生

それまで基本的に日帰り通っていたezorockに「職員住宅を使わないか」と支所職員からお声がけいただいたのが2019年。遊休施設となっていた旧助役邸を関係人口の滞在・活動拠点として整備を始めました。これにより、早朝からの農作業のお手伝いや夜も楽しいお祭りなど地域に「関われる」チャンスが格段に増え、浜益に通う若者の人数もぐっと増えるきっかけとなりました。

(3) 集落の教科書

2021～2022年にかけては「集落の教科書」作成の取り組みを実施しました。「集落の教科書」は地域のいいところも、そうでないところも赤裸々に載っているガイドブックです。2年近くかけて、若者が地域住民40人以上にインタビューを行い、作り上げました。このインタビューでは、それまでお互いに「ezorockの人」



集落の教科書制作のためのインタビュー

「浜益に住んでいる人」と認識していた人たちが「○○さん」と名前呼び合い、人となりが見え、より多くの場面で関係が深まっていきました。「浜益版集落の教科書」は第二版完成に向けて、引き続き取り組んでいます。

※ 集落の教科書は京都府南丹市なんたんのNPO法人テダスが始めた取り組み

5 いっぺかだれやから未来へ

2024年には浜益で「いっぺかだれやの会」が始まりました。「いっぺかだれや」とは浜益弁で「集まって、たくさん話そう」の意味。地域住民自身を中心となり、浜益支所、ezorockの協働で、地域内外から時には50人以上が集まり、浜益のこれからを話す場になっています。いっぺかだれやの会は、活動報告から始まります。今、浜益で何が起きているのか、どんな活動が行われているのか、地域に住んでいても詳しくわからないことを報告しあい、学び合い、そこからまちの未来に向けた話し合いが行われています。活動報告から始まるのは、昔を振り返るのではなく、今の浜益で起こる新しい動きを地域のみなさんに知ってもらい、未来について話すための工夫です。当初、地域住民が集まり話し合う場を想定してスタートしましたが、想定以上に地域外から浜益に関わる人々も集まり、住民と共に、同じテーブルで話が盛り上がります。

浜益にとどまらず各地で過疎地域の世代交代が急速に進んでいます。単純な衰退ではなく、担い手が若返り、前に向かって進み始めるまちが出てきていると感じています。地域の担い手は、その地域の住民だけではないのではないのでしょうか。住民と一緒に、学び、協力し、互いを尊敬しながら地域の担い手となれる関係人口を、浜益から今後も発信していきたいと思えます。



地域に関わる人のためのゲストハウス

「はまますベース」HP

<https://hamamasubase.studio.site/>